八幡山城跡出土軒平瓦についての一試論

ー主に製作技法・製作痕跡からー

山 口 誠 司

目次

１．はじめに
２．先行研究と本稿の視座
３．山麓居館群出土の軒平瓦
４．八幡山城跡出土軒平瓦の同文・同系資料
５．八幡山城跡例から考える織豊期の造瓦技法
６．おわりに

― 論 文 要 旨 ―

滋賀県近江八幡市に所在する八幡山城跡の山麓居館群で出土した瓦類は年代観の確かな定点資料と評価でき、織豊期の瓦研究に占める位置は大きなものと言える。これまでコビキＢの出現時期や文様凸部に金箔を施工する金箔瓦の初期の事例として論じられてきたが、現状では、資料群の全体像が明らかになっておらず、編年研究上の基準資料化が十分になされているとは言い難い。

そうした状況を踏まえ、本稿では軒平瓦の製作技法・製作痕跡や同文・同系といった類例資料の比較検討を通して、八幡山城の瓦生産・供給に携わった造瓦集団について考察した。また、年代観の確かな八幡山城の軒平瓦の製作技法・製作痕跡を検討対象としたことで、織豊期の製作技法や製作痕跡の変遷を明らかにすることができた。さらに個々の製作技法の検討のみならず、個別の技法・痕跡の相互関係から、その出現・消滅の背景を捉え、さらに別の技法上の変化を読み取ることを試みた。

キーワード
織豊期　八幡山城跡　軒平瓦　製作技法　製作痕跡　同笵　同文　同系